



写真3. マンガリツア

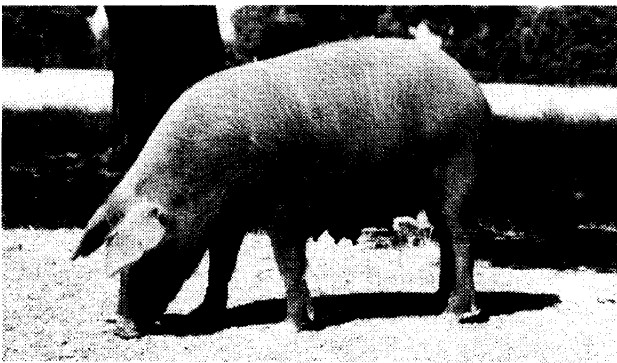


写真4. エストラマドラ



写真5. 香猪



写真6. 蔵猪

遺伝的に異った特性を持ったものを保全しなければならない。その点で中国に飼われている品種には、いま先進養豚国で主要品種として飼育されているものと遺伝的距離の遠い品種が数多く存在している。

体の小型の香猪、蔵猪などは、実験動物としてのミニチュアピッグ作出の素材としても興味ある存在であろう。

(4) 伝染病による種豚移動の制限:

最後に最近の傾向として、新しい伝染病の流行が種畜の移動を制限し、これが育種を進める上の大きな阻害要因になっていることを指摘したい。

豚に限らず一般に家畜の遺伝的改良には、地域をこえて種畜を交換し、新しい遺伝子型の個体を作ることが不可欠である。ところが近年は萎縮性鼻炎とか流行性肺炎あるいはオーエスキー病といった、致死性ではないが生産性に大きなダメージを与える防ぎ難い病気の発生が目立ってきた。ことにオーエスキー病のまん延は国内での種豚の流通を途絶させ、ひいては種豚登録をする個体の数を半減させるに至っている。

第一項に挙げた系統豚交雑種の利用にしても、この伝染病の防除がなければ完全な実施は期待できない。

緬半ではスクレーピーという潜伏期の長い適切な診断法や予防法の見つかっていない伝染病の発生が、世界的に問題になっている。オーストラリアでは、発生を見ているヨーロッパからの種畜の輸入をストップして懸命に侵入を阻止しているが、育種の面からみればその影響は大きなものがあるといわざるを得ない。

わが国の豚の育種の進展のためにも、オーエスキー病などの防除が一刻も早く実現することが望まれる。

住所：〒300-03 茨城県稲敷郡阿見町3998
茨城大学農学部

豚のヘコヘコ病

渡辺一夫(千葉県農業共済組合連合会家畜臨床研修所)
Watanabe, K.(1992). "Heko-Heko" Disease in Pigs. Jpn. Pig Vet. Soc., 20:15-16

ヘコヘコ病とは、管内で肥育豚に重篤な慢性肺炎が多発した際に養豚家が付けた病名である。慢性肺炎の症状としては、呼吸数の著しい増加と強い腹式呼吸が主徴であり、特に、腹式呼吸のために腹がヘコヘコと波打つことからこの名が付けられた。

1. 発生状況

このヘコヘコ病は1989年の秋頃から管内の大型養豚

場で集団発生するようになり、*A. pleuropneumoniae* 1型による急性の胸膜肺炎の次に大きな被害をもたらしている。被害の程度は飼養規模や飼育形態によって異なるが、飼養頭数の増加に伴い、発症頭数も増加する傾向にある。年間の死亡事故発生率は1990年が最も多く離乳頭数対比で7~12%であった。そして、単月では20%を超える農場もあった。

発生は、主に体重約35kg以下の肥育豚にみられ、哺乳豚が発症した例もみられた。好発日齢は約50日齢前後である。また、発生時期は秋口から春先までで、特に冬場に集団発生が多くみられた。発生豚舎は密飼いで換気不良の場合が多い。初期は散発的な発生であるが、ヘコヘコ病が発生すると肥育豚の発育が遅れるために密飼状態が悪化し、発症頭数が増加する。このように悪循環が生じ、集団発生が起こる。そして、ヘコヘコ病の発生は死亡事故頭数の増加、出荷頭数の激減および飼料要求率の著しい悪化を招く。

2. 症状

症状は冒頭に述べたように強い腹式呼吸が特徴であるが、この他に、被毛粗造、削瘦、体表蒼白（貧血）、活力の低下、食欲不振、発咳、発熱、アイパッチおよび運動を嫌い伏臥を好むなどの症状が見られる。また、四肢の関節が腫脹しているものも散見される。症状の進行は緩徐であり、次第に衰弱して死亡する。前駆症状としては、発熱に伴う体表の発赤と活力の低下が見られ、呼吸器症状はこの後に徐々に強く現れる。ヘコヘコが現れたものは、飼育環境を変えない限り治癒率は低く、ヘコヘコの強いものは予後不良である。

3. 病性鑑定

1) 病変

肉眼的には病変は胸腔に集中しているが、腹膜炎を伴うものもみられる。肺と胸壁との癒着もみられ、癒着は慢性経過のために非常に強い。しかし、癒着は必発ではなく、むしろ癒着がないものの方が多い。肺の病変は広範囲に認められ、病変部はMPS様の赤褐色から淡褐色肝変色を呈し、病変部と健康部との境界は必ずしも明瞭ではない。また、後葉に膿瘍が認められるものもある。膿瘍の大きさは粟粒大から母指頭大まで様々である。

2) 細菌検査

分離された菌は、*P. multocida*, *H. parasuis*, *A. pleuropneumoniae*, *B. bronchiseptica*, *A. pyogenes* および *Str. suis* 等様々であった。しかし、約60%は *P. multocida* であった。また、菌が分離されない例もあった。これらの症例のうち2例からマイ

コプラズマの分離を試みたところ、1例から *M. hyopneumoniae* が分離された。

集団発生の時期は、オーエスキー病の移行抗体の切れる時期と一致する場合が多い。しかし、発症豚の数例からオーエスキー病ウイルスが分離されたのみで、ヘコヘコ病とオーエスキー病との関連は不明である。

4. 治療および予防対策

病巣から分離された菌の薬剤感受性はほとんどが多くの抗菌剤に対して良好な感受性を示した。しかし、抗菌剤だけでは延命効果が認められるものの治療はほとんど期待できなかった。発症豚を比較的早い時期（呼吸が速迫浅表とならないうち）に、換気が良くて保温のできる所に数頭ずつ隔離して飼育すると半数は治療した。

予防対策は種々試みたが、やはり抗菌剤による予防効果はあまり期待できず、従来から言われているような基本的な飼養管理が一番効果的であった。すなわち、哺乳期間を28日とし、換気に心がけ、飼育密度を適性に保ち（子豚を販売してでも）、計画した移動日齢（例：子豚舎から肥育舎へ移動する日齢）を守ること等である。また、発症した場合は、舎内環境の見直しと発症豚の隔離が集団発生の防止に効果的であり、集団発生した場合は発生豚舎をオールアウトするのが発生を断ち切るのに最も効果的であった。

ヘコヘコ病は現在でも集団発生が見られ、発生農場はやはり、飼育環境に問題のある農場である。1991年7月からオーエスキー病のワクチンを使用しているが、発生の防止には現在のところ役立っていないようである。ヘコヘコ病の発生は日和見感染が原因であるので、発生防止には基本に添った飼養管理を行う以外に方法は無いように思われる。しかし、豚の生理を無視した豚舎を持つ農場では、ヘコヘコ病を清浄化するためには豚舎を建替えなければならない、対策が非常に困難である。

住所：〒292-03 千葉県君津市末吉437

千葉県農業共済組合連合会家畜臨床研修所